
Stud poker

となりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Stud poker

【Nコード】

N2953P

【作者名】

となりの

【あらすじ】

黒の組織との対決を終え、”工藤新一”としての自分を取り戻した名探偵は、本来あるべき日常へと帰還していた。

そして、暮れなずむ街角で、彼は一つの邂逅を果たす。

それは必然のように。運命のように。

予感と言うよりは、確かな望み。約束されていたようなその巡り会いを、新一はずっと待っていた。

前編 【街角／ホールカード】

「それじゃあ、私はこれで。お大事になさってくださいね」

「うん、ありがとう。本当にごめんね」

ぺこり、と頭を下げて踵を返す少女を、申し訳なさそうに、けれど人好きのする笑みで傍らの男が見送る。

新一は、じっと観察する視線をその男に向けていた。

均整のとれた細身の肢体を包む黒い学生服。少々癖のある黒髪が、夕風に軽く翻られる。

言動や、表情。それらがとても活発な印象を周囲に与えているのだ。だがこうして見れば、彼は、秀丽と形容して良い容姿の持ち主であるのだということに気づかされる。指先の造詣など、驚くほど整っている。

そうやって遠慮のない、というより不躰な視線を浴びせしていると、少女が人波に消えるのを見送った男がため息を吐いて、呆れたと言わんばかりに新一を見返した。

「あのさ、そのあからさまな視線、やめてくんない？」

もっともな意見、だが、新一は悪びれるどころか、にやりと口角を上げてやり返した。

「ああ、わりい。あんなハリウッド映画みたいな所業をやらかす男に興味があつたんで、ついな」

「……オレだって、やりたくてやったんじゃねえよ」

疲れた口調で、彼が認める。そう、この学生服の男は、先ほどの銃撃からあの少女を護ったのだ。

夕暮れのざわめく町並みの中で、こうして彼と新一は出会った。これも、母親の導きなのだろうか？ と、新一は苦笑する。だとしたら、感謝すべきかも知れない。

この日、このタイミングで、普段は通らないこの道を歩いている

ければ。

ここで、彼と並び立つことは出来無かっただろうから。

Stud poker

米花町の高級住宅地に、一際異彩を放って佇む邸宅。

世界的ベストセラー作家を家主とするその邸宅は、豪邸と呼ぶに相応しい外観と、快適な住み心地を実現する設備が備えられ、隙の無いセキュリティが布かれた御屋敷である。

……で、あるのだが。

今現在、その屋敷は、庭草が伸び放題で人の気配も薄い、鬱蒼とした様相になり果てていた。一部の子供には『お化け屋敷』などと囁かれていた始末である。

それは、現状における、この屋敷のたった一人の住人である一人息子の新一が、最近までやかいかいごとに巻き込まれていて家の手入れが出来なかった……という理由があった。

しかし、それも一ヶ月前までの話だ。完全解決した今に至ってもなお荒れ放題なのは、彼の性分のせいだった。曰く、面倒臭い。

そう、新一はその時も大層面倒臭げに道を歩いていた。

というのも、工藤邸の調度品が外国製の輸入品ばかりで揃えられているせいであった。母・有希子の嗜好で調えられたそれらは、やたらと凝った造りの物が多い。そして各部屋の照明も例外では無かった。ソケットのサイズが普通の電球と違って、コンビニ程度では合うものが売っていない。

そして、一昨日の晩、玄関の灯りの電球が切れた。厄介なことに、ちょうど予備の電球が一つもなかった。

「……………うあー…かったりい…」

第一声がそれだ。結局その日は買いに行かなかった。

次の日は日暮警部から殺人事件の応援要請が来て、学校が終わってから現場に直行した。午後の授業中に連絡が来たのだが、そこはそれ、長期間休学していた身としては抜け出せるはずもなかった。そんなことをしたら、どうにもこうにもならなかったところをなんとかくつつけた首の皮が千切れてしまう。それはまずい。蘭たちを卒業式で送り出す立場になってしまう。あまつさえ、服部あたりに先輩風なんか吹かされたりしたら工藤新一一生の不覚である。

また、現場に着いてから一悶着あった。容疑者が揃っていなかったのだ。そんなこんながあつて、結局解決して家路に着いたのは、9時を廻った頃だった。日本警察の捜査態勢や機構についてぼやいていた新一は、玄関に入り、電気を付けようとして、そこで電球が切れていたことを思い出した。電気屋はもう閉まっている時間である。新一は、今度こそ日本警察の問題点を上げ連ねて悪態を吐きながら、玄関を上がり、暗い廊下を歩いた。

何故廊下まで暗いのかと言えば、玄関からリビングへ続く廊下の電球は、1ヶ月程前にその寿命を終えていたからだ。玄関の灯りがあればそれなりに視界が利いたので、新一は廊下の電球を切れたまま放置していた。

その結果、

……足の小指を硬いものにしこたまぶつけて、30秒くらい蹲ることになった。

工藤邸の廊下は広い。中央を歩いていれば、端に置いてある段ボール箱に足をぶつけたりはしなかっただろう。だが如何せんこう暗いと、本能的に縋る物を求めて壁に手をつきながら歩くことになる。置いてあった段ボールの中身がまた曲者で、何週間か前に母・有希子を送ってきたなにやら怪しげな缶詰類がぎっしりと詰まっているものだった。玄関先で受け取り、開封し、そのまま廊下に置きざられていた箱が、ここぞとばかりに自己主張をしてきた。

暗がりです。一人悶絶した新一は、明日こそは電気屋に行こうと、心に誓ったのだった。

ちなみに、強烈な自己主張で存在を知らしめた段ボール箱は、超高校生級の蹴りを食らうことになった。が、結局痛がったのは母の愛を蔑ろにした息子の方だった。

そんなわけで、翌日新一は学校帰りに駅の方に廻り、今日こそはと電気屋で電球を購入したのだ。店から出てみれば、もう日は沈み掛け、夜の帳が緩やかに落ちようとしていた。人の行き交う路上は、その時間帯特有の活気に満ちた空気が流れ、家路を急ぐ者や、一日の締めを仲間と騒ごうとする者達で賑わっていた。

新一はそんな人々に混ざりながら、少し顔を顰めて昨夜の怒りを思い返していた。なんだか、もしかしたら全て母に仕組まれているのではないかとすら思えてきたところで、そのことを考えるのはやめたが。

そうなる後はもうただ大層面倒臭げな表情で、別段急ぐ風でもなく、ポケットに手を突っ込んで、昨夜読んだ推理小説の駄目出しを思考しながら歩いた。

——その音が聞こえたのは、そうして五分も歩いた頃だった。

『ビシッ』……と、なにか堅い物が割れる音が、喧噪に混ざって、新一の耳に届いた。なんの音かは解らない、が、つい足を止めて周りを伺う。そういう習性はもう、探偵としての職業病のようなものだった。

しかし、新一の周りを過ぎる人は変わった様子もなく、足を止めることもない。

気に留めるようなことじゃなかったか？ と、新一が歩を進めよ

うとしたとき、今度は『ガイン』という音共に、新一の斜め右前方、電柱の足下に置かれていた空き缶がはじけ飛んだ。

「！」

カインカラカラ……と空き缶がタイル張りの道を転がる。

「……っ！」

新一はそれに目を留めて息を呑んだ。

近くを過ぎるサラリーマンも不思議そうにそれに目を留めたが、それは一時で、やはり足早に通り過ぎて行く。暮れなずむ往来、誰一人として異常に気づいている様子はなかった。

だが、新一の目は確然たる異常を捉えた。空き缶には引きつるように穿たれた風穴が。

——弾痕だった。

（——狙撃！）

新一が、そうして周りのビル群を振り仰いだ——そのとき。

「……！！」

新一の、右斜め前方——件の空き缶のあった電柱の奥——の路地から、黒い人影が風のように飛び出してきた。

突然のことに反応が遅れる。新一は、体を硬直させたまま、目だけでその影を追った。

影は、しなやかな身のこなしで、疾る——！

（学生服？）

ドキリ、と鼓動が胸を叩くのを自覚する。……黒ずくめの服に過剰に反応する癖が、まだ抜けていない。

それは、一瞬のことだった。

影が疾り、新一が瞠目し、

「——きゃあ……!?!」

往来の一人の少女に影がぶつかり——いや、影は少女を抱きかかえるように倒れた——、少女と影の足下で地面のタイルがひび割れ、破片が微かに舞い上がり——……

転瞬、

新一は、路上に倒れた二人へ駆け寄った。

立ち止まってざわめく通行人を押しのけ、上体を起こし掛けている二人の元へ跪く。

「おいっ!?! 大丈夫……」

——大丈夫か!?! とは、言い切れなかった。影……いや、学生服の少年が、新一の言葉が終わるのを待たず鋭く言い放ったからだ。「右斜め後ろの最上階ッ!」

その気迫に吞まれそうになる。——が、少年の睨み上げてくる双眸に魅せられたのは一瞬で、新一は、端的に告げられたその言葉の意味を的確に理解し、そちらへ意識を向けた。

体ごと反転させてそちらを振り仰いだ新一の目に、映るか映らないかのタイミングで、廃屋の窓、人影が闇へ——死角へとスッと融けた。

（——野郎っ!）

——逃がすかよ!

見た——、その転瞬、新一は機敏な動作でダッシュを掛けた。その動きに躊躇いはない。

——しかし、

「追うなッ!?!」

鋭い声で呼び止められ、たたらを踏む。声の主はやはり学生服の少年だった。

（――な、んだよ!？）

強い強制力を持った声に、従わされる形で足を止めてしまった新一は、慥然として振り返る。少年は此方を見ていなかった。もう立ち上がっていて、少女に手を貸して、何か話しかけている。

「――おい!」

思わず苛立たしげに呼びかける。犯罪者を前に追うなどはどういうことだ、と。こんな往来で発砲する危険人物を野放しにすることになるんだぞ、と。

警察機関に片足を突っ込んでいるような新一としては、それが自然な発想だった。

だが、少年の方はそうは思わなかったらしい。新一の呼びかけに応じて、ちらりと向けられた視線には、呆れの色が滲んでいた。



「ごめんな、最近貧血気味で、立ちくらみ起きちゃったみたい」
申し訳ない、と頭を下げて謝る彼を、少女は最初こそ不審そうに警戒した目を向けたものの、あっという間に態度は軟化し、逆に彼に労りの言葉を掛けるほどになった。

それは、学生服の彼の容姿が良く、笑みも、口調も柔らかいものだったためだろう。表情が豊かで、語り口も妙に愛嬌がある。

だが、まずなによりも。

「今は気分どうですか?　なんだったら、休めるところまで、私付き添いますよ?」

「おお、優しい!　……でも、もう大丈夫だよ?　ご心配には及びません。オレ、丈夫なのを取り柄だから♪　……あー、迷惑掛けたお詫びにお茶を奢りたいとこなんだけど、実は今日、情けないことに財布持って無くてさ……お礼も満足にできなくてほんと申し訳ない!」

新一は、クルクルと表情を変えつつ少女と会話を交わす少年を見つめながら、腕組みをして数分前のことを思い返していた。

少女は、いや、この雑踏の人々は、恐らく、彼に気づかなかったのだ。細い路地から飛び出して来た彼に。

そう。思い返してみればそうだったのである。あの時の彼にはいわゆる気配というものが無く、さながら夕闇の陽炎のごとし。少女が彼に気づいたのは、きっと抱きかかえられ倒れ込んだ時になってからだ。

そして、あの声。

『右斜め後ろの最上階ッ!』

『追うなッ!!』

指向性を持ったその強い声は、切り込むように新一の耳へ飛び込んできた。だが、あんなにもはっきりと聞こえたあれば、実際は囁くような音量であったのだ。

だから少女は、耳にしたら疑心を生むであろうそれを聞くことなく、あっさりと、彼が貧血で倒れたことを信じた。

だが、自分はそうはいかない。ひとつ決心をする新一の前で、話がついてこのまま分かれることになった少女が、学生服の少年を見つめ後ろ髪を引かれるように眉を下げている。

「大丈夫、心配いらなですよ」

新一は、にっこりと少女に笑いかけた。いわゆる営業スマイルである。

傍観を決め込んでいた新一が突然割り込んで来たことに二人が軽く瞠目する。少女の頬が幽かに紅く染まった。

鈍感の上に夕暮れである。少女の熱には気づかず、新一は頷いて見せた。

「こいつの面倒ならオレが見ますから」



日は益々傾いて、緋色の世界が藍に染め変えられつつあった。その中で、少女を見送った新一と学生服の少年は、その場で斜に向かい合って立っていた。カーブを描く道の、デッドスペース。段違いで建てられたビルの作る隅だから、通行人に邪魔にされることなく二人はそこにいた。

『ハリウッド映画のような所行』を『やりたくてやったんじゃない』と、少年は認めた。

……つまり、往来の中に撃ち込まれた銃弾の被害者になりそうだった少女を、その軌道から回避させるために、少年は少女を押し倒したのだ。

新一は、『偶然銃撃に気付いて、その乱射する銃口が少女の方を向いたように見えたから、咄嗟に体が動いてしまった』という少年の言葉を黙って聞いていた。

「なあ、あのこ、このまま帰しても大丈夫だったかな」

そう言って、少年が難しそうな表情で新一を見た。つまり、先ほどの銃撃が無差別ではなく、彼女を狙っていたのではないか、再び狙われることはないのか、と問うているのだ。

その質問に、思わず新一は鼻で笑ってやりたくなって、しかしそれを堪えた。

代わりに、素っ気なく肩をすくめてやる。

「さあな」

——と、投げやりに。いい加減もいいところの返答である。少年が、眉を顰めて新一を睨め付けた。

「さあなって……あんた心配じゃないのか」

「ああ、まあ……別に心配なんかしてねえな」

チカチカ、と頭上が瞬く。落ち行く光度に反応した街灯に明かり

が灯っていく。

「……そんなに冷淡な人間だったとはな」

青白い灯火のもと、抑揚のない声が低く流れる。その台詞に、再度新一は肩をすくめると、改めて彼に向き合った。

冷淡だ、というなら、侮蔑の表情でも浮かべればいいのに、向かい合った相手は、それを躊躇っているように、中途半端に顔を歪めていた。

（――まったく、このお人好しめ）

「……勘違いすんなよ。お前がこのまま帰したんだ。だから心配してねえって、そう言ってるんだよ」

ふ、と笑みを零して新一は言う。

「あの子に危険はないんだろ？」

「……言ってる意味がわからねー。オレがあんたに訊いてるんだろーが」

「じゃあ、なんでお前はオレに訊くんだよ」

「あんたが、有名な高校生探偵、工藤新一だから」

「ふむ。なるほど、オレのこと知ってるんだ」

「オレ、あんたと顔がそっくりだってよく言われんだよ。たまに、見知らぬ人間にそれで握手とかせがまれるくらいだぜ」

ちよっと首を傾けて少年が疲れたようにため息を吐く。嫌なことを思い出したのかもしれない。

「――あー……、まあいいや」

だが、ふと気を取り直したように、少年は、微かに笑みを取り戻した。

「あのこの事も、あんたが心配いらないうって言うなら、きっと大丈夫なんだろう。探偵さんの考えることは難しくてオレにはよくわからないけど、問題ないならそれでいい」

「待てよ。オレの推理、聞かねえのか？」

「……それは警察にしてやったら？ たぶん、オレ、聴いてもわからないだろうし。ついでに事情聴取とかそういうのあるならあんた

にまかせちゃいたいんだけど」

平然と言つてのける彼の言葉に、ひくり、と新一は口の端を引きつらせた。

警察に、してやったら？　ときたか。良い度胸だ。

「オレがこの話を警察にしたら、お前が困るんじゃないのか？」

挑むように、言葉を投げつける。きょとんと、目を丸くして相手がしらばっくれるのも予測済み。

「はあ？　なんでオレが困るんだ？　まあ、確かにこの後用事があるし、事情聴取とかで拘束されるのは嫌だなーとは思ってるけど」
ことん、と首を傾げて相手が問い返してくる。どうでもいいが、この学生服の少年は、首を傾げる仕草がよく似合う。愛嬌があるというか、お洒落なかんじだ。

「しらばっくれやがって……」

新一は、相手のペースに流されないように、長くため息を吐いて間を取った。

そして、先ほどからずっと気がかりだった、彼の右手に視線を落とした。

「お前、その右手、退かしてみろ」

「……はあ？　なにその命令口調」

新一は、新一の指図を訝しむ、無然とした表情の彼をじっと見つめた。

日は、既に地平に落ちた。だが都心の夜空は明るい。頭上には青白い白熱灯。彼の顔色が酷く白く見えるのが、そのせいだけならばいい。

「お前、その唯我独尊な態度改めねえと、友達なくすぞ……」

新一の揺るぎない不遜な態度。それに諦めたように溜め息を吐くと、少年は、腰に当てていた手をスツとはずして、降参というように上げて見せた。

「……………」

新一は、思わず身を乗り出して凝視した。しかし、サラリとした

学ランの生地にはなんの異常も見られない。

右の腰にずっと当てられていた右手を不審に思っていたのだ。少年は、少女を庇った後、立ち上がってからずっと、さりげなくそこを押さえていた。だが。

新一は視線を強くして沈黙した。負傷をしたのでは、と危惧していたが、杞憂だった……ということだ。

「……あのさ……なんなの？」

『困惑』、というよりは『うんざり』に近い声が、姿勢を低くした新一の頭上から降る。

「あんたは納得してんのかもしんねーけど、オレにとっちゃ滅法不審で、対応に困るんだけど」

言葉通り気味悪そうに半歩退いた彼を、新一は、むっとして見返した。それなりに心配をしてやったのに、不審人物呼ばわりとは。

しかし、学生服には傷も裂けた跡もない。ならば気の回しすぎだったのだろうと、新一は乗り出していた身を引いて、取り繕うように咳払いを一つわざとらしく落とした。そう、魔法では無いのだから、もし負傷していたらあれだけ何事もなかったように目を欺ける訳がないのだから。

「心配してやって損した」

照れ隠しのように、ケツと憎まれ口を叩く新一を、益々わからんというように首を傾げて彼が見る。

「お前って変なヤツだなー」

しみじみと言われた。感心したというか、呆れたというか。

その言い方に、新一はムツとして口を開いた。

「てめーには言われたくねえんだよ、黒羽快斗！」

（夜な夜な、怪盗なんて奇天烈な所業をやったのける、てめーにだけはなっ）

さすがに、数瞬の間があった。

「……………なんで……オレの名前、知ってるんだ？ 名乗ったっけ？」

「いいや。人をフルネームで呼び捨てておきながら、名乗りもしてねえオメーはよ。まあ、オレはお前のこと、最初から黒羽快斗だって知ってたから、必要なかったけどな」

「……で？」

彼——快斗が、微妙な表情で促す。

「なんで、オレの名前知ってたんだ？」

ふ、と新一は笑って腕を組んだ。

「オレの母親・工藤有希子……旧姓・藤峰有希子が、昔、お前の父、黒羽盗一さんと懇意にしてたのは知ってるか」

快斗の眉が、僅かひくりと顰められる。そして、彼はなるほどと頷きを落とした。

「確かにオレとお前は、そういう伝手の繋がりがあったな……」

そして、それ以上の言葉はなく、快斗は口を噤んだ。

そうせざるを得なかったからだ。『怪盗キッド』ではなく『黒羽快斗』へ踏み込んできた新一のせいだ。

「……………」

快斗が僅かに思考に沈むように黙り込む。新一は快斗をまっすぐに見据え、組んでいた腕を解いた。

時機が来たのだと、新一は直感していた。だから、退く気はない。

——退かせやしない。

「……なあ、黒羽」

新一は、今まで知識として仕舞い込み、口にしたことがなかったその名で、彼を呼ぶ。

「さっきお前は、あのこをこのまま帰しても大丈夫かって……オレに訊いたよな」

「……………」

「その質問に、改めて答えるなら……イエスだ」

射抜く視線で真っ直ぐ捕らえ。新一は、先ほどは呑んだ台詞を、今度ははつきりと快斗へ告げた。

「なぜなら、あの狙撃手がターゲットにしていたのは、彼女ではなく、元からお前だからだ」

溜め息を吐いた快斗が、緩やかに首を横に振る。

「……やめてくれよ。そんなむさっくるしい。可愛い女の子に付け狙われるならまだしも」

「ん？　可愛い女の子かもしれないねえぜ、あのスナイパー。それともあれがどんな人物なのか心当たりがあるってことか」

「じょーだん。変な知り合いはもうたくさんだっつーの。探偵とか、魔女とか。胡散臭いのは十分間にあってんだよ」

「……まじよ？」

訝しげな新一の台詞に被るように、快斗が大きく息を吐く。新一は目を光らせた。

「こら、逃げる気か？　話は終わってねえ。こっちはお前の名前もどこに住んでんのかも知ってたんだからな。明日江古田高の校門で待ち合わせたいってんなら、行ってもいいぜ」

彼が一步後退したのを目敏く見咎めての牽制を、間髪入れずに投げたのである。

だが、その時に気づくべきであったのだ。それが、その一瞬まで完全に平静を装っていた彼の、限界を知らせていたのだと。

そう、忘れてはならなかった。彼は、偽装のプロであるのだと。

そして、偽装はあくまでただの目くらまし。隠された事柄は消えることなく、そこにある。

新一の言葉を受けて、嫌そうに目を細めた快斗が、は、と息を吐く。

「……さいあく……」

……糸が、切れたように。

その一言を言い終わらぬうちに、がくん……と、快斗の膝が力を失った。

◇

「キッ……、——黒羽……ッ！」

崩れ落ちた快斗の姿に思わず動揺して、声が上がった。
慌てて膝を折り、座り込んだ彼と同じようにひざまづいて、肩を掴む。新一は、悔しげに唇を噛んだ。疑っていたのに、見抜けなかった。

「お前、やっぱりどっか怪我して——！」

「……ちよっと……眩暈がしたただけだ。——騒ぐなって」

覗き込む新一を制するように快斗が右手を上げる。上目遣いに新一を見上げて、肩をすくめて見せた。

「最近寝不足で。あの子に言った貧血気味ってのも、あながち嘘でもなかったんだよな。……だから、帰っていいか？ 少し疲れた。帰って寝たい。——……なあ、工藤。だから放してく——」

言いかける快斗が、僅かに安堵したように息を吐いた。要望通り、快斗の肩を掴んでいた新一の手がはずされたからだ。

しかし、唯我独尊——先ほど己で指摘した目の前の人物の性質を、彼は失念していたのだ。

その結果、立ち上がろうと慎重に腰を浮かし掛けた快斗は、唐突に伸びた新一の腕の回避に失敗した。

「——な……っ」

瞠目した時にはもう遅い。回された腕に首根っこを掴まれ、引き寄せられる。頭を抱え込まれるように、新一の肩に快斗は額を押しつけていた。何が起こったのか分からなくて目を白黒させるが、「——ぎゃっ……ちよ、な、なんだよっ!？」

相手の更なる暴拳に我に返り、あまりの事態に慌てて抵抗する。しかし、新一はそれを黙殺して快斗を拘束し、手も止めなかった。それどころか、一層不機嫌度を増して、手を動かす。

肩から、腕から、脚、腹部——無遠慮に触って、撫で回す。

左手で快斗の体を撫で、右腕で頭を抱いていたのを、今度は左右を切り替える。

「コラっ……てめえ、いいかげんにっ……! ——っく……」

腕を換える為に拘束が弛んだ一瞬、快斗が逃れようとするが、新一はそれを強引に押さえ込む。

立ち上がり掛けていた姿勢を崩されて捕まえられた快斗は、不利な体勢に陥っている。頭を抱え込まれた状態では、抵抗らしい抵抗も出来ない。

ただ、胴ががら空きの新一に痛い思いをさせる方向でなら幾らでも術はあるだろうが、新一は、今腕の中にいる人物が、そういう手段のとれない気質だということを知っていた。新一の行動の理由に当然気付いているだろう相手は、その新一を暴力でもって引きはがすことはしない。出来ない。

だが、それを差し引いても。

……快斗の抵抗は、緩慢で弱く。

それが腹立たしい。

(寝不足だト——?)

では、これは——この鼻腔をくすぐる”これ”は、なんだというのか。

そう。

肩を掴む距離まで近づいた彼の身体からは、血臭が漂っていたのだ。

「！」

新一は、はっと僅かに目を睜り、動きを止めた。掌には、じわりと濡れた感触。体温と、同じ温かさの。

——無意識のうちに、指先に力がこもった。

快斗が僅かに息を詰め、その身を強ばらせた様子が、新一に伝わる。

……落ち度の無い快斗を理不尽に責めるのは、完全に癩癪まがいの八つ当たりだ。

その自覚があったから、新一は一瞬で力を抜いて、ばつが悪そうに謝罪を口にした。

「……わりい」

それを受けて、快斗が、ひょいと肩をすくめる。許すということなのだろう。

新一は、快斗の頭を抱え込んでいた腕を、ようやく弛めた。

「はー……」

体を起こした快斗が、大きく息を吐く。疲労困憊なその9割方が自分の行動の責任だということはスルーして、新一は、快斗の左脇腹に当てていた手をゆっくりと外した。

チラリと仰向けてみれば、案の定、街灯に照らされてぬらりと光る掌は赤く濡れている。

右脇腹をずっと押さえていたのは、”二択”への誘導だったというわけか、と新一は舌打ちをする。

血を滲ませる左脇腹は、どういう細工か、目で見ただけではそれと分からないようになっていいる。だが、この出血の原因が先ほどの銃撃であることは疑いようがなかった。

ここまで平静を装っていられたくらいだから、内臓に損傷のある怪我ではなさそうである。しかし、膝をつくほどの消耗を見せる彼を、一刻も早く手当した方がいいことに変わりはない。

偽装と同時に簡単な止血はしてあるのかもしれないが、それならなおのこと、学ランまで濡らし始めた出血を放ってはおけない。

「おい、黒羽——」

「——つか……」

しかし、厳しい顔で口を開いた新一は、往来を眺めてぼやいた快斗の声に、それを阻止された。

「……オレら微妙に目立ってるんですけど」

「……………」

ジト目で呟かれたその言葉に口を噤み、新一は、初めて周囲へ意識を向けた。

快斗の視線に促されるようにして、背を向けていた通りの方へ振り返ると、まず、こちらを注視していたらしい女性とおもいつきり目が合って、新一は僅かに面食う。女性は慌てて顔——明らかに赤面していた——を逸らして足早に去るが、好奇の目を向けているのはその女性だけではなかった。

人だから、という程ではないが、ちらほらと足を止めている人間——女性の比率が高い——が目に入る。足を止めていない通行人でも、こちらに視線を向けていない人物を捜す方が難しいという状況で。

一つのこと集中すると周囲への注意が散漫になる短所を反省しつつ、新一は、ジト目の快斗を呆れて見返した。目立ってしまったのは、明らかに、お前が抵抗して騒いだせいだろう、と目で語る新一は、自分の行動そのものを顧みるしおらしさを持ち合わせていなかった。

ともかく、これではやりづらい。

新一は重いため息を吐くと、手を貸して快斗を立ち上がらせた。観念したように大人しくなった快斗を引っ張って、細い路地に入る。



新一に腕を引かれて連行された快斗は、濃い闇に満たされた路地に入るなり、ずるずると壁に縋るように崩れ落ちた。

掴んだままの彼の右腕が、ぐったりと重い。

「悪い。本当に、ただの貧血なんだ」

「『ただの』かどうかはともかく、貧血なのは見れば判る。……お前、さっきのようなこと、今日が初めてじゃねえな……?」

ひざまづいた新一は、快斗の肩を掴んで支えるようにしながら、確信を込めた口調で詰問する。

「傷、見せろ。止血は?」

「へーきだって。ちよつと掠っただけだから。この程度なら、しばらくすれば自然に止まる」

「……………」

新一は、眉間に険を刻む。

”どうということはない”と、うそぶくその発言が、つい先ほどの新一の問いを暗に裏付けた。

これが、今の怪盗の日常であるのだと。

「お前……なにやってやがんだ。だらしねえ」

新一は誇るように吐き捨てる。それで伝わる相手だから、不快感を隠さない。

——こんな弱った怪盗なんて、悪い夢でも見てるみたいだ。

「……つと、待った」

「なんだ。……手、放せ」

新一は、携帯電話を取り出した手を思いの他強い握力で掴まれ、快斗を睨み付けた。

だが、快斗は怯まず、同程度の圧力を有する視線で新一を睨み返してくる。暗闇の中で、底冷えするような青い双眸が剣呑に光る。

「まさかと思って訊くが、誰か呼ぼうとした訳じゃねえよな」

「……浅く見られたもんだな。オレがこの状況で、救急車や警察を呼ぶと思うのか」

「ってことは、隣の家の博士か。てめえ、オレが”それ”を止せつ

て言ってんのが分かんねえのか――？」

「っッ！」

低く流れた声と共に新一の手に激痛が走る。思わずビクリと痙攣した指の間から、携帯電話が滑り落ちた。

新一の手の甲に親指を突き立てた快斗は、滑り落ちた携帯を空中で攫い、そのまま軽く手を振っただけで、それを容易く消失させる。

「……てめえ――」

新一は、唸るように毒突いて、空になった手で学ランの胸元を乱暴に掴み上げた。正面から、視線ががち合う。

月光を集めたような、静謐たる青い双眸。未だかつて無い近さで、その底の知らない瞳を覗き込んだ新一は、雷光のような光を青い双眸に宿しながら、恫喝の言葉を吐いた。

「オイ、キッド。テメーでは散々人にお節介焼いて来やがったくせに、こっちからの手は拒もうなんて、そんな虫のいい話が通ると思ってるのか？ ……ここでオレの手を振り払おうってんなら、覚悟出来てるんだろうな……ああ？ オレは即刻、江古田高だろうと、テメーの自宅だろうと、訪ねていって報復してやるからな」

「――……」

「…………」

「…………」

「……オイ」

半眼で、新一はこめかみに青筋を立てた。

「テメー、真面目に聴けよ。蹴るぞ」

「……く、……ふは、……なことも言っても、ははっ、だめだ！ もう我慢できねー！」

「…………」

新一は、胸ぐらを掴み上げられたままケタケタと笑い始めた、月下の奇術師を白い目で見つめる。本当に蹴ってやった方がいいのだろうか、と考える。肩と、学ランの胸元とをそれぞれ掴んでいる新一の両手に、殆ど体を支えられている状態なのに、この怪盗は。

「すっげーな！　なんでオメーって、セレブな家の人間のくせに、そんなに柄悪いんだよ……！　しかも、怪盗を脅して従わせようとする探偵とか、ねえーだろ！　っははは！」

「……………」

（くそ……やりづれえな）

表面上は、笑う快斗を白けた目で眺めている素振りで、新一は、内心静かに臍を嚙んでいた。

のらりくらりと追求を交わすかと思えば、白い装束の時のような気配を出してみたり。かと思ったら、瞬時にそれを木っ端微塵にして笑い転げたり。

そして、拍子抜けするほどあっさりと、自分が怪盗キッドだと認めるような発言を繰り返す。

攪乱し、動揺させて、油断を誘っているのか。

（——いや、違う）

本当に、余裕が無いのかもしれない。そう思い至って、新一は、唇を引き結んだ。

どこことなく覇気のない口調。闇に包まれているので顔色は分からないが、掴んでいる肩の温度が低い。

「……………」

新一は、学ランを掴んでいた手を静かに解くと、それを降ろし、先ほども触れた箇所へとさりげなく伸ばした。が、

「おっと……暴力は良くないぜ、名探偵」

「……もうあんな風にはしねえよ。いいから、さっさとそれ、きちんと止血し直せ」

出血具合を確かめることは出来なかった。触れる手前で新一の手は、快斗のそれに押しとどめられていた。

新一は目を細める。触れている手指もやはり冷たい。いくらポーカーフェイスで笑んでいるようにも。

「……………」

焦燥を押さえ込んで、新一は冷静に怪盗の様子と心裡を観察する。

向こうも、こちらとの距離を量っている筈で、だから、下手な読み間違えをすれば、新一の両手に肩を支えられている怪盗は、この体だろうと、新一を振り払い、逃亡を図ろうとするだろう。それを許容できない新一は、軽口を叩くようにしながら、慎重に言葉を選ぶ。「キッド……これ以上愚図るようなら、麻酔針打つぞ」

「げ。オメー大きくなったのに、まだあいう反則アイテム持つてんの」

「”元に戻った”と言え。何が反則だ。便利なもんは使うに決まってるんだろ。大体テメーが言うかよ。……で？ マジで打たれてえようだな？」

「んー、名探偵が負ぶってくれんならいいぜ。マジで睡眠取りてーし」

「バーロー。そんな疲れること誰がするか。テメー眠らせたら携帯取り戻して、阿笠博士に連絡して車で迎えに来て貰うんだよ」

「ふむふむなるほどー、じゃあ、やっぱり麻酔はバツテンだな。没収」

「……………」

謳うように宣言し、快斗が、手の中の物をプラプラと振って見せる。

新一は、傍らに転がっている自分の鞆を、ちらりと見た。——おかしい。あれの奥の方に入れてあったものが、どうして今、目の前の男の手の中に収まっているのだろう。

一体、いつの段階で掠め取ったのやら……怪盗の抜け目の無い性質は、こんな状態でも遺憾なく発揮されるようだ。

(……いや、こんな状態だから、なおさらか)

黒羽快斗が狙われている、という状況。

『博士や哀を介入させること』を、怪盗はどうあっても拒む気なのだということが解った。車を持つ博士の機動力や、哀の医療系に強い知識は頼りになるのだが、諦めるしかなさそうだと、新一は溜め息を吐く。

怪盗はハートフルだが、馬鹿じゃない。その怪盗が頑なに拒んでいるものを無理に押し通すことは、恐らく、怪盗の危機をいたずらに煽ることに繋がるはずだ。

新一は、江戸川コナンの頃から愛用している時計型麻醉銃が、怪盗の翻す手によって忽然と消失するのを見送って、肩で大きく溜め息を吐いた。

携帯電話を奪われた時とは違い、手も挙げず、容認を示すような新一の態度に、快斗が片眉を上げて微笑した。

先ほどのまであつた、はぐらかすようなニュアンス。それを含まない声で言う。

「悪いけど、これ以上増やせねえんだよ。……名探偵が、彼らを頼りにするのは構わねえさ。両名が頼りになるってことも知ってるよ。だけど、オレに関わらせるのは……やめてくれ」

ゆっくりとひとつ瞬きを落として、静かに声を紡ぐ。

「これ以上急所が増えたら、流石に生き残る自信がない」

「……………」

「なあ、名探偵——」

呼びかけながら、その目は、大通りの方へ向けられる。

「さっきの女の子な。……本当に、オレとなんの関わりも、繋がりも無いんだ。……もう、”そういう”状況なんだよ」

「……………」

『いつから』と、新一は奥歯を噛む。いつから、この怪盗はこんなことになっていた。

とりまく、劣悪な環境。

快斗を中心にして覆い被さる暗雲のようなそれは、黒羽快斗が居た路地の側を偶然通りかかり、運悪く選ばれただけの少女にすら悪意を降らせる。

通りすがりの少女が”こう”ならば。

はたして、黒羽快斗と親しい人間の上には、何が降りかかることになるのか。先ほどのスナイパーや、その背後にいる連中の目に、

その存在がどういふモノとして映ることになるのか。そして、それから護るために、快斗がどういふ行動を余儀なくされるか。

新一は数瞬の間瞑目した後、瞳を上げ、意識を切り替えるように声のトーンを変えた。

「――黒羽。とにかく、もう一度止血をし直せ。そしたら、移動するぞ。オレが負ぶって運んでやる」

「……へ？　――マジで？　つーか、突然気前いいな」

「コナンだった頃、オメーに何度か背負われたり、抱えて運ばれたりしたこと思い出した。……やっと、元の体に戻ったんだ。意趣返し……じゃねえ、恩返しに、そんなくらいしてやるよ」

「――オイ。今オメー、思いつきり意趣返して言ったぞ」

怪盗が律儀にツツコミを入れながら、新一の腕に手を掛ける。そうして体重をかけるようにして身を起こす怪盗を、新一は口の端を上げて見遣る。

それを受けた怪盗が、不敵……と言うには苦笑の比率が高い笑みを見せる。

――正解。

無関係の人間を黒羽快斗へ近づけようとする行動を頑なに拒んだ怪盗は、だが、伸ばされた探偵の手を邪険に振り払おうとはしていない。

『名探偵が負ぶってくれんならいいぜ』

――上等だ。

オレがコナンだった頃、テメーが勝手にかつさらっていったのと同等の重みを、

今度は、オレがテメーから取り除いてやろうじゃねえか。

前編 【街角／ホールカード】（後書き）

ホールカード【hole card】…スタッドポーカー（stud poker）で伏せて配られる札。

後編 【舞台裏／ブレッツ】 (1) (前書き)

※注..途中に挿絵あり。

後編 【舞台裏／ブレッツ】（1）

「……なんでこんなことになってんだ……」

「別に、嫌ならやめてくれて構わないぜ、オレは。元々、オメーに脅されてなきゃ、オメーに名も教えずに、あれでサヨナラするつもりだったし。いーんだぜ？」

「……るっせーな。黙ってキリキリ歩いてろテメーは」

「うっわ……すんげー横暴。そもそも最初にグダグダ文句言ったのはテメーだろ」

唇を曲げて不服を零す相手の腕を、新一は、突き放す言葉とは裏腹に、もう一度己のそれでしっかりと抱え直した。

傍らを歩く相手の減らず口が続いていることを、はたして”よし”とすべきなのか。……この相手は、その判断が付けづらいから厄介だ。

組んでいる腕の力も、減らず口も変わらない。だが、唯一歩調だけが、僅かに遅れ始めていることに先ほどから新一は気付いている。歩き始めてまだ5分だが、やはり、歩かせるのは無理があるのかもしれない。そう新一は思い始めていた。

ふらつきは見られない。が、それをフォローする代償のように、脚捌きが僅かに鈍くなってきた。

「……負ぶってくれてもいいんだぜ？」

新一の視線をチラリと見返して、快斗が言う。

ペースの落ち始めた歩調に、ずれることなく付き添う新一の如才なさ。快斗もまた、それを見落としてはいなかったのだ。口から出たのは、素直な感謝ではなく、不貞不貞しい台詞であったが。

新一は、半眼になった目を進行方向へと戻した。

「オメーが元の格好に戻るんだったら、負ぶってやってもいいぜ」

「……あのな。オメーはどうしてそう、変なところで物解りが悪い

んだよ。それがダメだから、オレがわざわざ変装したんだろ」

「だから、『なんでそれが一々女装なんだ』って……オレは言いてえんだよ。『黒羽快斗』じゃなきゃ、別に男でもいいだろうが」

新一はうんざりして、組んだ腕の先の人物を見遣る。

歩みに合わせて揺れる、前下がりのボブヘア。綺麗に揃った黒髪はサラサラのストレートである。黒髪に縁取られた顔はマスク無しの素顔だが、華奢なフレームの眼鏡が顔の印象を変えている。

顔立ちが元々中性的に出来ているから、はたから見たら、完璧に女子に見えていることだろう。

黒いコート、ベージュのチュニック、濃紫のティアードスカートに黒レギンス。ショートブーツ。服装も当然のように全て女物だ。それらを違和感なく着こなしていることが、新一にしてみれば、逆に違和感だった。

（怪盗キッドとしてのこいつと相對していたときは、舞台役者を見ているような感覚があったのかも……）

学生服姿の黒羽快斗から変身されると、どうも素直に受け入れがたい。

少女へと早変わりした快斗を見て開口一番。

こんなの背負ったりできるものか、と、新一は、女装をした快斗を背負うことを拒否した。絶対に目立つ、と。

何を考えているんだと批難したもののだが、快斗には快斗で言い分があった。この方が目立たないのだ、と。

不毛な言い争いは、早々にやめた。主張が平行線だったからだ。結局間を取る形で、女装の快斗を腕につかまらせて、新一は歩くことになったのである。

そうして、夜の空気を深めながらも皎々と明るい往来を、探偵は、女装の怪盗と腕を組んで歩き始めた。

そして、数分も歩かぬうちに精神的疲労に蝕まれた探偵は、冒頭の台詞を吐き出したのだった。

> i 2 3 1 9 0 — 3 0 8 0 <

「お前、今からでももう一度別の男に変装しろよ。マスク使って」「だーかーらー……オメーはホント人の話聞かねーな……！ いいか？ いい年した男が、同じ年頃の男負ぶってたり、腕組んで歩いてたりしてみろ！ アホほど注目されんぞ！」

「なんでだよ！？」 男と女が腕組んで歩いてる方が注目されるだろ、つか、されてるじゃねーか！ これで、オレがそのカッコのオメー背負ってたりしたら、下手すりゃケータイで写真とか撮られてる勢いだぞ！」

「ねえーよっ！ ったく、いつもは平気な顔して衆目集めてやがるくせに……。普通だったら、これほどは注目されねーんだよ。オメーがな？ 無駄に顔が売れてるのがいけねーの！ ……だから、せめてウィッグだけでも着けろって言ったじゃねーか。オメーの彼女に浮気を疑われても、オレは知らねーぜ？」

「な……っ バーロっ、大きなお世話だッ」

冷やかすような台詞に噛み付きながら、しかし、怪盗の理屈も一理あると新一は心中認める。ウィッグだけでも着けろと言われたものの、そんな手間すら厭わしくて、変装の済んだ快斗を半ば引きずるように歩き始めたのは確かに自分だ。

今だとして、言葉の応酬をしながらも、とっととこの偽装の達人を休ませたくて、道のりを急いでいる。

「……じゃあ、若い女じゃなくて、せめて、ばあさんとかにしろ。じいさんでもいいぞ」

「今日はお年寄り用の一式は持ってねーの」

「……チッ……いつもは何でもかんでも持ってやがるくせに、使えねーな」

「てンめー……マジシャン、なんだと思ってやがる。四次元ポケット持ってるわけじゃねーんだぞ。キャパシティってもんがあるに決まってるんだろ。オレがいつも色んなもの持ち歩いてられるのは、そのキャパを高い技術で底上げしてるからで——」

「——へーえ、まあ、キャパはともかく、チョイスがどうなんだろうな。役に立たねえもん持ち歩いててもしょうがねーんだし、いざというときにこれじゃあな」

「……………フツ……………なるほど。名探偵の言うことにも一理あるな。……そうだな。例え、腕を組んで歩いてても全く違和感のない、女の子の変装セットが2組あっても、片方の探偵の技量が期待出来ない以上、使い物にならねーもんな。変声機使って下手な演技するのが精一杯だもんな」

「……………そこまで言うならやってやろーじゃねーか。出せよ、女装一式！」

負けず嫌いを刺激された新一は、半ば本気で女装を宣言したが、快斗は、実に憎ったらしい顔でそれを一笑に付す。

「は。ムリムリ、どんな組み合わせより一番目立つちまうよ。女装の男だってバレバレで」

「だとコラ。オレだってコナンの頃、歩美ちゃんや灰原に変装して完璧に相手を騙し通したこともあるんだよ！」

「おやおや……。それ、自慢しちゃうの？ それこそ失笑もんだね。やだよ。子供と大人じゃ根本からして違うんだよ。小学一年生の子供なんて、まだ男女の違いが身体的にちっとも現れていない時期じゃねーか。そんなの、服装変えただけで、それこそ小学生だってこなせる変装だろ」

「ぐっ……………」

正論を突かれ言葉を詰まらせる新一を見て、快斗が笑う。

「まあ、オレやお前はそんなにガタイいい方じゃねーし、その辺のアドバンテージは元々あるんだよ。ただ、一挙手一投足……所作の細部が一番の肝なのさ、変装ってのは。そこさえこなせれば、多少

ゴツくたって、ちゃんと女に見えたりするもんだ。……お前の場合、……頭で理解、してることで動作……が……」

「……！」
——つらつらと講釈を垂れていた声が、不意に言葉を途切れさせたのは本当に前触れもなく。

新一は、慌てて立ち止まって、預けられた体重を支えた。

「……っ ——どうした？」

「……わり……ちよっと、待ってくれ」

顔を俯ける快斗が、それだけ言って僅かに瞑目する。一度、大きく息を吐いた。

「……オッケー。行こうぜ」

「——黒羽」

ニツと笑って顔を上げた快斗へ、新一は、平坦な声で告げる。

「お前が倒れたら、オレはお前背負うからな。目立つのが嫌なら、目的地までしかっかり保たせろよ」

「……りょーかい」

「——……ったく」

新一は不機嫌そうに顔を顰める。

女装をした時点で明らかだったが、『負ぶってくれるなら』などとうそぶいておきながら、そんな気など毛頭無かったのだ……この怪盗は。そのことに少なからず腹立たしさを感じる。言葉の綾だと言ってしまうばそれまでだが、負ぶってやる気満々だった新一は、消化不良だ。

いっそのこと、この女装した姿だろうと構わずに負ぶってやれば、怪盗のうわてに出られるのかもしれない。

が、それはどう考えても目立ちすぎるので、実行する気は起きない。怪盗の方も、新一がそうすることはないだろうと信頼していて、この姿なのだ。

消耗で脚が遅れようともし軽口を叩き、周囲の気配に絶えず気を張り巡らせている怪盗。

それに倣い、新一もまた、再び同伴者の体重を強奪気味に預かって大人しく歩くことにする。

「……つーか、なんで別の男に変装しないのかが、全く理解出来ねえ」

「……………」

「どう考えても男女の組み合わせよりもその方が目立たねえだろ」

「……オメーはさあ……………あーもう、そんなに言うなら、試しにまず誰か——あの西の服部平次でも背に負ぶって、大阪でも東都でも街中歩いてみて来いよ……」

「はあっ？ バーロツ、なんでオレが無駄に服部背負わなきゃなんねーんだよ！」

「それでも考えが変わらなかったなら、今度は背負わせてやるよ、めーたんてー」



新一が、最後に、あの白い怪盗を直接目にしたのは、一ヶ月前のことだった。

それは、あの黒の組織との決戦の地で。まだ、新一がコナンであった時の事だった。

『火事場泥棒に來た』と飄々とのたまわった怪盗は、混乱に乗じて施設内を動き回り、確かに何かを探っていたようだった。

が、その傍ら、射殺されそうになった哀の危機を当たり前のよう

に救って、結果、FBIに銃を向けられたり、
また、瓦解し崩れ落ちる天井からコナンを庇って、負わなくてい

いはずの怪我を負っていたのも事実であった。

そういうヤツだとは知っていたし、立場が逆なら、おそらく自分も同じ事をしただろうということは想像できた。

だから彼に助けた理由は問わなかったし、新一は、ことさら感謝の言葉を重ねることもしなかった。

怪盗はハートフルだが、その実、お節介ではない。

大抵、怪盗がこちらの手助けをしてくるのは、致命的な何かが起こりかけた時に限られる。こちらの力だけで切り抜けられる場面で出しゃばることを怪盗はしないのだ。特に、新一に対してはそれがはっきりしていたように思える。

多少の危険や怪我が予想されても、新一の手で十分に負える状況と判断すれば手出しをしてこない。しかし、その範疇ではないと見れば、たとえ自身への負担が掛かることになる場合だろうと、躊躇のない行動を怪盗はとる。

このときも、助けがなければ恐らく命を落としていた。

足を、床の瓦礫に挟まれた。そこに、子供だったら押しつぶされて全身の骨を圧壊させかねない落下物が、頭上から降り注いだ。

砂煙の上がる中、一瞬の混乱の後、覆い被さる誰かに庇われたことを理解するのは早かった。しかし、『それ』が怪盗であることを受け入れるのは、不覚にも数瞬の間を要した。抱きかかえられることは不意ながら今までも何度かあったが、ぐったりと倒れ伏す姿を見るのはそれが始めてで、なかなか現実離れた光景だったのだ。

焦って揺り起こせば、幸いすぐに怪盗は意識を取り戻した。コナンの全身骨折の代わりに、怪盗は背を強打した。比較をすれば被害は軽微で食い止められた結果だが、痛み慣れるまでの数十秒間、声も出せずにいた怪盗を、コナンは硬い表情で見下ろしていた。

持ち直した怪盗に、『大丈夫か』とは尋ねた。だが、感謝の言葉

を告げることをコナンは終始しなかった。

『借り』を『返してやる』つもりではいた。ただ、その形を『言葉』で済ませる気がなかったのだ。

だからコナンは、今までも、当然のように行われる手助けを当然のように受け入れながら、怪盗に礼を述べたことが一度もない。

それは、以前から漠然と思っていたことだった。

——立場が、逆なら。

今度は、同じ事を自分が。

白い怪盗に命を救われた回数は、一度や二度のことではない。

そのたびに当然のようにそれを受け入れ、当然のように同じ形で返すと決めていた。

あの双子のように似通った赤の他人とは、そうでありたいと思っていた。

だから、怪盗が危機に追い込まれるときが来たなら、必ず。

怪盗の隣に立ってやろうと、新一は決めていた。

空を飛ぶ翼を持つ怪盗がそうだったように、新一は、黄金の手足で。

怪盗に『借り』をかえしてやろうと、そう決めていたのだ。

ひよこひよこ現場に現れてはこちらの危機を救い、黒の組織壊滅作戦に密かに一役買った怪盗は、炎上する組織の施設内で別れの挨拶らしい言葉も無く別れたまま、コナン——いや、新一とはそれきり顔を合わす機会を持たなかった。

新一が元の生活へ戻った後の一ヶ月あまりの間も、怪盗キッドが

予告状を出すことは一度も無かったのである。



「――よっ……と」

新一は、慎重に姿勢を低くして、ゆっくりと、自分も半ば座り込むような形でベッドへ着地した。二人分の体重で、ベッドが軋む。

そのまま上半身を捻るようにして向きを変え、背にもたれさせているここまで担いできた体を両腕へと収めた新一は、ぐったりと脱力した体温の低いその上体をかかえ支えて、ベッドへゆっくりと倒してやる。柔らかな布団へその背を落ち着かせた手で、今度は、ベッド端から床へ落ちている、黒いスラックスの両脚を持ち上げて、シーツの上へ伸ばして置く。

（どうせ着替えるなら、もっと楽な服にすりゃいいものを）

意識を飛ばす直前に、この部屋の上がり口で早着替えを行った怪盗は、黒羽快斗の姿へと戻っていた。

江古田の学生服。

ただし学ランを着ることはしなかった。また、ワイシャツには血の染みはなく、真っさらなものを身に纏っている。

快斗が新一を伴って向かった先は、米花町の繁華街から徒歩で行ける賃貸アパートだった。

4階建てで、1フロアに部屋は僅かに2つ。その2階、向かって左が、怪盗の保有している部屋らしい。

たった1階分ではあるがエレベーターで上がって、はたから見れば若いカップルに見える2人は、腕を組んだまま部屋の前へと辿り着いた。

扉を解錠し、中へ入る。後から入った新一が扉を閉めて顔を上げ

たその目の前で、ターンするように床を蹴った怪盗は、着ていた女物のコートを大きく翻した。遮られた新一の視界が、一瞬後再び捉えた怪盗の姿は、黒羽快斗へと立ち戻っていた。

黒い学生服のスラックスに、白いワイシャツ。少し収まりの悪い黒髪。

そして、擬態を脱ぎ捨てたその背がそのまま傾いで壁にぶつかるように寄り掛かったので、新一は、土足で三歩、フローリングを踏む羽目となった。

ずり落ちる体をどうにか掴まえてから、『バーロー!』と、罵りの声を上げようとした新一は、腕で支える人物が意識を失っていることに気づき、それを溜め息へとすげ替えて吐き出した。

床には、女物の服――快斗が女装に用いたもの――が散乱している。その光景は、新一に、ふと、この怪盗と最初に出会った事件を思い出させた。蘭に変装し、見事に予告の宝石を盗んで見せた怪盗を、あの船倉で追いつめた高揚を。

あの時脱ぎ散らかされた服は、新一を足止めする囷だった。

だが、今は、ただ脱ぎ捨てられてそれは床に落ち、怪盗は、意識を失って新一の腕の中にあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2953p/>

Stud poker

2011年9月8日16時22分発行